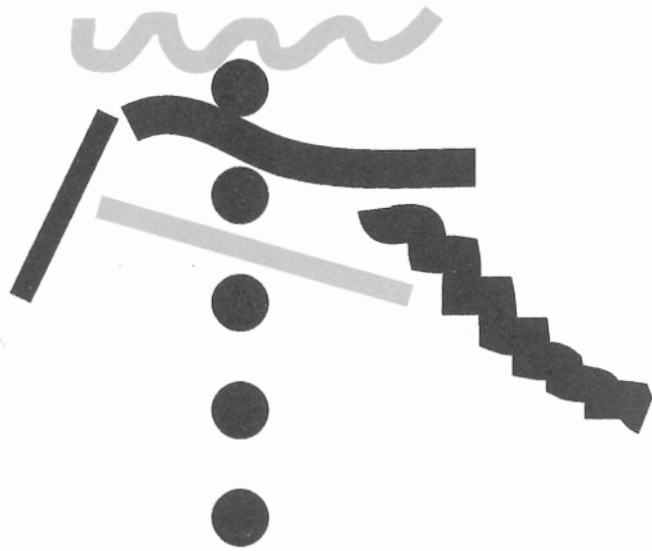

月 刊

Mélange

VOL.78



2013.02.24

詩/エッセイ

月刊 『Mélange』 VOL.78★

2013/02/24

月刊 『Mélange』 編集部

詩

装身具……………にしもとめぐみ 04

滝壺……………野口裕 04

ねじれた時間にするといひこと……………福田知子 05

さよなら……………川田あひる 06

ああ、原罪が帰宅する……………岩脇リーベル豊美 07

奈落論……………千田草介 08

しばたたかせて……………大橋愛由等 09

ふとんの前と後ろ……………メノツキオ 10

連弾……………寺岡良信 11

猫模様〜ブログ詩より……………富哲世 11

すてきなトウフ・ステーク〜「天童大人（肉聲の世界）で読む」……………安西佐有理 12

有時秀記詩篇『眠りの門』への詩歌による返歌……………大橋愛由等／大西隆志／高谷和幸 14

エッセイ

△詩人通りより②「ローゼ・アウスレーダーの帰郷」……………岩脇リーベル豊美 03

△夜の調べに寄せて④「シヨスタコ」事件と心の糧……………寺岡良信 16

△神戸詞あしび⑥7「南風と北風が出会う季節に」……………大橋愛由等 20

福田知子著『ノスタルギイ』について……………寺岡良信／中堂けいこ 13

綾見謙・年譜（シンポジウム「綾見謙（兵庫詩人）の世界」資料）……………18

書評

年譜……………18

先日、ある日本の学会での個人研究発表に応募するために、発表要旨、所謂abstractの1200字を送信した。締切り日が謝肉祭最終日の火曜日だったので、特に浮かれることもなく精進するつもりだったにもかかわらず、学会発表というものはコツコツと研究を進めている研究者のための場所であって、所属学科ゆえに日本で発表する事を余儀なくされた者が行くところではないと思いはじめたり、また、このところ少なからず遠くかかってきたテーマについて原稿用紙3枚分に要約するには当然ながら全体の概観がなければならず、捏造するわけにも行かず、難航を極めてしまった。何よりも久しぶりにabstractを日本語で書くことに非常な道行き不案内を覚えたのは自分です。

ユダヤの亡命詩人ローゼ・アウスレーダー(1901-88)の詩は、ローゼだけでなくエルゼ・ラスカール・シューラー(1869-1945)やヒルデ・ドミン(1909-2006)といったユダヤ系女性の詩は、独語で書いていても言語としての故郷喪失が滲み出ていて興味深い、というより私は好んで読む。ローゼはユダヤ系ドイツ人としてルーマニアのチエルニウチー(当時はオーストリアハンガリー帝国領、現ウクライナ)に生まれ、20歳のときに大学の同窓イグナツ・アウスレーダー(後の配偶者)とともにアメリカへ亡命する。1965年ドイツに戻るまで離婚転職、米スパイ容疑で逮捕されたりしながら欧州と米国を行き来することになるが、大戦中は郷里のユダヤ人ゲットーに隠れ住

でローゼはもともと古典表現主義的詩風と既に英語詩の時代から展開してきた米モダン主義の色彩を融合させていったと見られている。母国語への帰郷である。否、その途上である。

その頃のローゼの詩のひとつ「言語のSprache」を日本語に翻訳してみた。

「あなたの営為に私をつなぎとめて／いのちある限り／あなたのなかで息をしたい／あなたという水に餓え／ひとことひとこと飲み干してゆく／我が泉よ／憤怒たる煌きよ／冬の言葉／リラのごとき繊細／私のなかで花開く／春の言葉／私は眠りにたどり着くまで／あなたを追い求め／あなたの夢を綴る／私たちは言葉でわかりあうの／愛しあうように」(Im Achtenregen: Die Spur deines Namens. Gedichte und Prosa. Frankfurt a. M. 1976.)

詩人通りより②

ローゼ・アウスレーダーの帰郷 岩脇リーベル豊美

も不思議なほどだった。内容的には、哲学への回帰から来る喜びと、かもすると爽りのあるものになるのではないかとという期待もあるが、今でも審査通過への不安は大きく、その大半が拙い日本語によるものである。

み終戦とともに解放された。ローゼは1956年まで英語でしか詩を書いていない。後のエッセーに戦時下の記憶とともに独語を「悪魔の言葉」と記している。それが何ゆえに再び独語での詩作を始めたのか。「不可思議にも英語のミューズは消え去ってしまった。外的要因はなかった、無意識の秘密だろう。私は1957年になって初めてドイツの現代詩に触れたのだ。そのとき、没頭していた世界が姿をかえてもうひとつの光の中に再浮上し、過去の諸形式は陰に入ってしまった」と残している。(Die Nacht hat zahlose Augen: Prosa. Frankfurt a.M. 1995.)この1957年に出会ったドイツの現代詩というのがまさしく同郷のパウル・ツェラン(1920-1970)であるが、彼の影響下

原詩はもつと面白い。表題のSprache自体も「言の葉」として訳し始めたけれどあまり詩的ではない。「言語」とせざるを得なかった。Fiederleinはローゼの造語であるが、それを「リラのごとき繊細」としか訳せていない。二人称単数のduも口語的に「あなた」と表記し、「あなた」が「言語」であり、それが彼女の存在根拠である面白さが表現できるところまで、訳者の言語感覚が到達していないということなのだろうが、手を入れようと思えばするほど現今の拙詩に帰ってくるようにも思えるのである。母国語とは、異国語とは、その言語感覚とは、すべて何処かへの途上である。

どんな言語であれ、ある言語を母国語としない者がその言語で文章を書いた場合、いくら完璧に近い言語習得を達成していたとしても、ネイティブの人たちが書くものとは異なる。文法や表現の誤謬を除いても、優良劣悪ということではなく、ただ違う。逆に、長期間、異国語で暮らす者はいつの頃からか、何を契機にしてかその母国語からずればはじめ、両面から急ぎ立てられて故郷喪失者に近づいていくのである。

彼の影響下

◆装身具

にしもとめぐみ

降り続く雨だった
十年も耳元で鳴り続いていた

身に付いた装身具となつて

滴が瞬いていた

やっとあがつて

遠くに……

◆滝壺

野口裕

そこをパチンコ玉が落下する
ビール瓶が落下する
紙コップが、消しゴムが落下する
犬も猫も

ツバメもカラスも落下する
滝と呼ばれる由縁の水以外のすべてが落下する

落下物の落下途上の瀑布から

ひよこひよここと槍が突き出て

突き出た槍で、パチンコ玉は跳ね飛び

ビール瓶は回転し

犬や猫の五本脚のシルエットと並ぶ焼き鳥

不思議と折れない槍は

いつ出てくるのか？

流血・粉砕・きらきら星

夜か昼かも分からず

分裂も孤立もざざざと降る

寝釈迦の転ぶ海原は別次元の

まだまだ先は長いですよと

なぜだろうどうしてだろうの俗事は知らず

抜き手を切つて泳ぐ人は無言で笑う

◆ねじれた時間にする

いいこと

福田知子

ねじれた時間
壊れた空間
毀れた奇跡に寄り添う
水のひたいの
風のあうらの
火のほむらの
平板なスクリーン

水があふれ
風が立ち
火が燃え立つ
その場所 トボス！
硝子の
究極の屈折光 が
あなたの湿った背中を照らし つたう

一度きりの約束は
夕方のきぎはしに
はたされぬ指切りは
くさむらの蔭穴に
器用なあなたは

できるかぎりこまかなゲージで編む
蛸のように吸盤を編み きぎはしから蔭穴に投げ
込む

ぎりぎりの列車を待つて

あなたはホームに駆け込み

ひらいて とじて ひらいてうごかしてみる

もどりとたつたその場所で

こころのゲージにおもいつきり人恋しさを散りばめ

急な登り坂ではぐれないよう

ふいに襲われる無重力に落ち込まないよう

わざと迷い込むふりをしたり

車窓の景色に魅かれてるふりをしたりしている

紫陽花の咲く季節までには

剥がれ落ちる予兆が見つからなくても

時のねじれに寄り添ってみよう

豆板醬はいいじゃん つていたこともあったよ

ね・・・
近くて遠い異国の味を中華街でぐるぐるめして

あの日 あなたはサイコーに味わい深くなつてい

たはずだ

けれど

知らないだれかに呼びかけられ振り向いて その

まま

日が暮れるまではしやぎ込んで

そのひとから—もうどこにも行かないよ

つて真顔で言われて・・・泣ぐむ

すると さつき食べたラーメンがほどけなくなり

あの日もねじれ やはり ねじれ・・・
いじけるほどねじれてしまった、ね

ねじれた時間を日暮れまで遊んでくれる

そんなやさしいともだちは

アリス、アモ、アヒルさん

ともだちはさいしょのいつ頃から遊んでくれるア

のつくひとがいい

もしくは いろはからはじめるなら

いのくまさん、イリスさん、いちもくさん がいい

いちどきにつどつて

いつときをわすれるほど遊ぶ

こえを

ありつたけのこえを

わたしたちはわたしたちのありつたけのたたずま

いをたたずま

ゆるがせ こえにのせて はなつのだ

沼の底の花が咲いた

沼の底に花が咲いた

金色の透きとおる 底の花

けれど

《あ》からはじまる約束はついぞかなわぬ

《い》からはじまる指切りはついぞ切られない

ねじれた時間にあつてするといいいこと

そう あなたに あなたから あなたを

そう、忘れたふりをして

ことばはせつなきみに透けていく

だから

はじまるまえに《あ》と《い》の声をかせよう

◆さよなら

川田あひる

緑と
茶の
いのちの
まぼらの 谷底に
わたしの通う
ビョーインがある
其処へ向かう
人通りのない道で
鹿が
黒光りする
前脚で
裏木戸を開けて
入っていくのを
目撃した
あの めめる毛なみの 鹿は
別れた夫だ

◆ああ、原罪が帰宅する

岩脇リーベル豊美

誰もが無意識に被害者となる可能性だけに慄き
善良さの証拠として
海外安全情報や避難勧告注意を収集する
一方では企業戦士という汚名で讃えながら
もう一方ではなぜ何の罪もないひとが
こんな目に遭わなければいけないのか
と問い直し笑う、あるいは泣く

罪の主体が意識を持たないという意味での自然である場合
容疑者に死刑判決を下せない傲慢を誇りではなく人間の弱さに転嫁
する

私が動くことが罪である
私が飛ぶことが罪である

この人生で初めて愛した男だ
わたしは見捨てられた
夜毎 夢に現れ
苦しめる
男を
神話にしたいと
祈願の末
男は
炎天下
鹿になり
しとやかな
雌になり
わたしは
緑と茶の
まばらないのちの
谷底から
這い上がり
「どうぞお行きください」
今
さよならする

私が書くことが罪である
私が願うことが罪である

罪とは何かに述語でしか答えられない罪

崖上の展望台には手摺がなく幼子を差し出しそうとする心理と
同性愛者の喋り方をもつ聖者がめししいを治癒する恩恵の片手は
一切が悉く似ていると思えるのだ

私は自分が意志もせずに加害者となる必然性に追われ
夜遅く憔悴に酔って帰宅する

ひとは間違いを犯す動物である

ひとは搾取する動物である

ひとは嘘が許された動物である・・・

ひとはXXする動物であると定義を重ねながら

◆ 奈落論

千田草介

大気の組成が偏向することにより惑星上の空調設備はことごとく齟齬をきたし養豚場の娼婦たちを生殖行為から逸脱させ聖典は金輪際の彼方に捨て去られて救世主は立つ瀬を失い煮沸された海域は生き物の進化を狂わせてペンギンは祖先のいた空域を希求し鯨どもは陸をめざす自殺行為をくりかえしてその肉を異界の者どもへの供儀としヨードチンキのようなアンモニアのような胆汁のような臭気で包みこまれた自意識をもつ機械どもの横柄さに手を焼く運転士飛行士航海士は目的のない舞踏に狂奔してその生命時間を消費するばかりとなれば性玩具はもはや肥満に肥満を重ねたかつての使用着から顧みられることもなく深海に水葬される廃炉とともに冥府へ赴くのだが薄っぺらな海洋地殻は永遠の安息には程遠く都市廃墟をのせた陸塊に当たってペリペリと砕けては散り弾道弾のサイロの遺跡を溶かして動脈軟化をおこした下水管網は地表を閉じ込められていた汚水で覆い尽くしあらゆる生物無生物を腐食すると万物は桎梏より放たれて重力の作用にしたがうので脊椎はもはや生体をささえることができず大腿骨肋骨頭蓋骨鎖骨百トンのコンクリート塊にプレスされたがごとく山が裂けて砕け落ちる下で真っ平になる。

◆ しばたたかせて

大橋愛由等

十八の腹ばいになった女たちの石の記憶のかなしみの香りを始元とする群れが有翼の聲となつて散々に飛び散りそのひとつひとつを記述しようとした南東風と南南東風の差異がわからないオノコは老臣たちに手玉にとられ片言が向かう先だからという教条のもとに廃兵院の鉄門をくぐる羽目となるのである

十八の血の滴りがついたワイシャツを着たまま歩いていると午前三時ちようどに出会つた黒石が云うには風の啼き聲と光の啼き聲が交差するA市の十字路には不全に満たされたどこにも行き着かない階段がありどこにも行き着かない魔王と出会うことになりその両手に握りしめている毛馬胡瓜の靈威を尋ねられることになり「火災報知機はサクラの枝にかけられている」と言えば一重まぶたをしばたたかせながら去つていくのだという

十八本の落ちた髪の毛を教えながら眉間に皺を寄せて寝ていた聲に対して「こうして神祇不祥が続いているからここでは朝に珈琲をこのようにしてこう呑むのである」(住所不定だつたこの三年間の居場所を聞き出すための秘策はいぶりだしである)「少女にある日の発語と入語の数をかぞえさせるという悪戯を考えだしたのは立春だつた」と言つたあとに夜光貝を見せて「深山で冥界の聲を微微とながら集めてこの貝に塗り込めたと言つていたオノコはやはり詐欺師に違いない」とひとりごちるのである

※「火災報知機はサクラの枝にかけられている」——ブルド
ン・エリユアール著『処女懐胎』(「自然の感情」より引用)

◆ふとんの前と後ろ

メノツキオ

・ふとんの前と後ろに雨が降っている。水滴の入射角と屈折角が描いた反対の虹を、みんながわたっているところだ。湿地帯の森林でキノコが空気の光る粒子を放散するような寝息。ふとんの背中と腹の擦り切れたコーラスに悲しくなってしまうって、ビールをたくさん飲んだ疲弊が、石器時代の寝具の中にあった子供の指先を一箇所に集めて燃やしていた。星空を燦らせる、この音が聞こえるかい。鯨と糸杉のつっぺんから食べにやってくるんだ。学園と交信を始めた頃に、僕は風に飛ばされた帽子について、あの子の顔面に浮かんだ水滴の恐怖について、焙烙の蓋をしたかに見える島について、雨脚に後ろを追いかけるながら思い出そうとしていた。前方の島へ、波を激しく割って進む舳にふとんは立っています。しぶきにずぶ濡れて人類はどのようなあの車輪を支えて、回していたのでしょうか？ 変容をしたのは胸板のふとんリアリズムであろうかと思ったりして。それでなければ叔父か叔母の含み名前がそれで、ふとんのただっ広い水蒸気にむせつつも思い出せないことがある。言葉の闇から浮かび上がらない重さ、人のしこりをふとんに封じ込めることは、「小鳥を鳴かせずに鳥籠に入れるようなもの」だろうね。もしも虹をわたるあなたたちならば、多元の末路を交差する人の奇妙な早さについて、それぞれの荷電体に名前をつけようとされるのでしょうか？ 疑いもなく、水面に浮かぶ波紋のような、あれは小鳥たちの鳴き声ですよ。ふとんの前と、それから後ろを食べにやってきました、あなた。

◆連弾

寺岡良信

鍵盤の蒼白い肌触りに
指はアルペジオをやめない
最期に樹氷を泳いだ
月光の喜悦のやうに

夜明けに風がつのれば
雪ははらはらと
ほどかれるだらう
わたくしのたましひもまた

心左手だけの詩人よ
置いて行きなさい
裏切った疼きは

隣に坐つた影がささやく

トウオネラの水が

喘ぎを伝へるやうだ

◆猫模様

フログ詩より

富 哲世

夜半から降りつづく雨が
凍える庭の冬を溶かし
なびく枯れ草の側溝を
くだる小川に変える
惜しかったね

もう少いで
人間だったのに
ほくらは喜びのほころのなか
ほころびのような
乏しい火を抱いて
芽生えはじめた心のかたちで
樹々の上の

藍い空の入口をじつと見上げていた
きつといつか
虹の懸かる空のような
明るいイミになりたくて
旋律は隠された
希みが集う天井の下に生まれ
影絵のまき場に
星座を追う

袋を被つた猫のように
きみもまたそうなんだらう
人になり損ねて
心があそびたくなる
そんな雨の日も
あるのさ

◆すてきなトウフ・ステーキ

安西佐有理

130209 0783312228 6500012
 19080713 1943 ホツホツ 19440
 310 ホツ
 19450317 ホツ 0806 0809
 ツホツホツ
 0403 0316 0518 ホツホツ 117
 33 ホツホツホツ
 1999 911 311 666 ホツホツ
 2012 777 ホツホツホツホツ
 1153 92.75 123.96 ホツホツホツ
 ホツホツ
 思わせぶりな数字ではない、顔じみたモノゴトの記号
 の羅列すべて
 にんが四千年なりエアコンの風にあたって
 少なくともうつつすらと埃をかぶっているから安心できない
 安全でもない
 平気では食べられない あるいは煮たり焼いたり、解凍さ
 れる前に
 退屈に耐えきれず自ら水を滲ませ溶けはじめたシステムの
 写しだから
 それでもよければ食べ続けたい
 あたしには、目の前にやってくる 今日
 トウフ・ステーキだけが
 宇宙とやらへの回路だ
 モメンのトウフ・ステーキは
 キヌゴシ風のトウフ・ステーキより 世間の風当たりに晒
 された
 纏ではくれない歯ごたえ著こたえ、舌の味蕾をぐつと押
 す重さ

通ぶるわけではないけれど、あたしは今日がそれがいい
 神戸にいる神戸に来たというだけで
 コウベ・ビーフのステーキを食べている場合じゃない
 産後後をまだ知らない
 今日あたしは 今日トウフ・ステーキがいい
 モメンのトウフ・ステーキと 瞬間の正面から対決するの
 がいい
 昨日の朝は何を食べましたか昼は晩は何回
 答えることはできたとしても それを食べたのはもうあた
 しではない
 血圧、カロリ、血糖なにやらは昨日も今日も知らない
 はいえ
 あたしは こないだのトウフ・ステーキを食べたあたしで
 もちろんあなたでもない
 聞こえてくる
 うちの台所の鉄製フライパン
 南京町の北京鍋 カルメンのパエリア鍋だか
 お好み焼き屋の鉄板の上にも遍満する(できる)
 トウフ・ステーキは
 いまにも飛びかかる、その時をめぐして
 唸っている 虎だ!
 ライオンだ! エヘンムシだ!
 やわな鏡を打てば弾き返される
 トウフ
 トウフ
 トウフ・ステーキ
 新鮮な体液をめぐらせ
 アルカイトクにはほほ笑む皿の温度硬度と熾烈にやりとりを
 繰り広げ
 トウフのステーキがやってきた
 ホツホツ ほつれ、すり切れそうな歴史、土地、人の痛みを
 痛みのまま縫い合わせる無骨な滑らかさ
 すてきな原始線条の記憶をキリリと効かせて
 トウフ・ステーキが実在している
 何年何月何日の何時何秒に、何円で調達され調理され何グ

ラムあるのかは
 此岸彼岸、バッドラックとグッドラックの彼方に消えて
 今こだけ これだけの トウフ・ステーキ
 「いただきます」「ちそうさま」
 そんなとおりにいっぺん唇の運動はいらぬ
 トウフになる豆
 豆畑を耕すトラクターに満たされたガソリン
 トウフ屋のおじさんらの
 この舌の一点へ強靱に向つてくる
 崇高な未来のヴィジョン、意志の矢先を黙って受けとめよう
 なにしる、トウフはあたしだ
 豆にガソリン、おじさんや
 トウフ・ステーキは
 あたしで 目の前のあなたで
 あしたを前にしたあたしたち
 さあ、そして
 口のなかお腹のなかで角がとれたトウフ・ステーキの
 はかりがたい力を
 もつと丸め、磨き上げよう
 頭の何センチか上に
 トウフ・ステーキだった白くやわらかな吐息をまあるく掲
 げて
 あたしたちは互いに目礼する
 次のトウフ・ステーキを迎え撃ちに行くまでの
 ジェントルで空虚な静けさを
 何度ともなく
 噛みしめ、噛みしめしながら
 130209 0783312228 6500012
 ホツホツと 数字と記号さえ、食欲でまっすい身体にしな
 がら
 2013.09.09

詩人 天童大人の“肉聲の世界”の会での朗読作品

書評

福田知子著

詩集『ノスタルギイ』

▼伏流する詩歌の伝統

—詩集『ノスタルギイ』より「春の嵐によせて」

寺岡良信

歌は呪術における呪詞から生まれた。弓状をなすこの
 小さな列島に大和王権が誕生すると、まつりごとを司る
 者は同時に詩人となり、山川草木に呼びかけて五穀豊饒
 を祈り、若き女性たちに求愛してその生殖能力にあらゆ
 る生命の繁茂を託した。

文物制度の発達には歌の洗練をも促す。中国からもたら
 された先進文明は人々の創作意欲を『文選』『文館詞林』
 『御覧詩』など詞華集への憧れで満たし、とりわけ仮名
 文字の発明は、帝王が編纂を命ずる「勅撰和歌集」の制
 度化へと道を拓いた。人麻呂、貫之、和泉式部、西行、
 後鳥羽院、定家と、綺羅星のごとき名人上手たちが歌の
 世紀を彩り、彼らが退場すると、観阿弥・世阿弥の能が
 無常観を背景に幽玄の世界を舞台に繰り広げた。連歌か
 らは俳諧が派生した。それは移ろう四季に対する愛惜と
 哀感をいつそう繊細に感受性へと取り込んで、芭蕉や蕪
 村を総帥と仰ぐ三都の商人たちに受け容れられた。

私が日本の文藝史を駆け足でたどったのはほかでもない。
 福田知子さんの詩集『ノスタルギイ』の第二章「か
 ぎりなくうたへ」を読むと、その時代その時代に達成し
 たわが国の詩的伝統と成熟が美しい余滴となつて諸篇を
 潤し、それはやがて永遠の伏流水のように、彼女の詩の
 基底を流れ続けるであろうことが予感されるからであ
 る。

「春の嵐によせて」を取り上げてみよう。

さみどりの 目覚めの際のみどりよ
 ゆきつ戻りつ みどりを折みつつ

「みどり」は詩集全体を貫く色調だが、この色の幅は明
 黄から青まで広く、みどりの黒髪という表現があるよう
 に、麗しい女性の生命力の瑞々しさの表象であることに
 心、この詩ではとくに閨怨を含んだ官能が満たされな
 い心の影法師をともした立ちのぼつてくる。舞台は王朝
 の物語か、能か。

追い越されるものたちよ
 醒め際の視線をたどるがいい
 一言主はほの暗い谷のながれに沿つて
 そおろり 奉唱する

これが眺に見る艶冶な夢だとすれば、この詩篇は虚無
 をさえ孕むほどに緩慢な恋の焦燥を巧緻な言葉の美の鑄
 型に溶かして、定家脚が歌った「春の世の夢の浮橋とだ
 えして峰に別るる横雲の空」を彷彿とさせる秀作だ。
 水脈、髪、仮寝、聞といった古語の艶やかな手触りと、
 それらが醸し出す春の夜の憂愁。水の匂いの立ちこめる
 この一篇を切ない余情で締めくくるのは、「声に墨をな
 がして」という卓抜な比喩であろう。ささめごとを交わ
 す男女の声音は心の風を鎮めて低い。
 紫式部が作者の身体に憑依してこの詩を書かせたのだ
 と言えば、詩人に失礼だろうか。

▼俯瞰する屋根

—福田知子著『ノスタルギイ』

中堂けいこ

きらびやかで豊穡なことばの群れ、息継ぎ(余白)の

地上に地上に。降り立てば、緑色の視界で織りなされ
 る神話未然のカタリ、騙り、詐欺師は須磨水族館のピラ
 ルクを駆け抜ける。熱帯雨林もジョージアの古時計も、
 ここでボーンと鳴る、耐圧ガラスのむこうの鯨族よ。
 「わたし」が「ピララーラ、ピライパー」と歌う、叫
 ぶ。三〇億年の酸素のかたみは私に手渡されるだろう。
 猫の足裏の肉球はたしかにふにふにしている、ばんざ
 い!このキュートな皮膚感覚を未必の故意で言つてし
 まえるのは、ばんざい!なのだ。そうなるかもしれない
 けどわざとじゃないのよね、ばんざい!
 こんなふうに陽が当たる場所はたしかに在る。万物を
 ハイライトで見つめれば詩のことばもまた、ハイライト
 に輝くにちがいない。そこには湿つた翳は必要ではない。
 肉欲を謳うならキュートな快楽は未必の故意であり、肉
 欲の痛みは無罪なのだ。母性から自由であることはい
 えんの少女(美)で在り続けることでもある。
 エロスは途方もなく欲望のまま拡がらねばならない
 (つてニイチェが云いましたか)。ならば光と水と緑がこ
 の詩集を明るく照らしだすだろう。

出版記念会の後、二次会会場までメランジュ同人の高
 木富子さんと歩いてきた。「私や中堂さんは屋根に上つ
 て、ポーと空を見上げるつてことあるけど、福田さんの
 詩には、屋根に上つても空を見上げるつて無いのよね
 …」。高木さんの指摘により福田詩の足場に気付かされ
 た。彼女は屋根の上にいるのだ。そこから風景を見渡し
 ている。風景の向こうに過去・現代・未来・記憶の粉碎
 と再構築を俯瞰しているのだ。屋根の上では強固な自我
 意識がせめぎ合っていることだろう。

2013・2・21

仲間内の符牒とか隠語とかというものは、おそらくどんな集団にもあるのだろうが、それがあつた種の特権意識をまとうと少々鼻持ちならなくなる。クラシック音楽の通を自認する連中が好んで使いたがる省略語の習慣も、その一つだ。たとえば、モーツァルトの『レクイエム』を「モツレク」と言う。ドヴォルザークの『交響曲第八番』は「ドボ八」。バルトークの『管弦楽のための協奏曲』は、オーケストラのためのコンチエルトを略して「オケコン」。そうそう、昔LPレコードだった時代には、メンデルスゾーンとチャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲が必ずカプリングされていて、生意気盛りの高校生はそれを「メンチャイ」と呼んで粋がついていた。幸か不幸か私の体内には、その頃からコトバに関して頑迷なる保守的嗜好が蟠踞しており、今も「携帯電話」を「ケータイ」と発音する言語感覚に、虫の居所によつては嫌悪を覚えたりするくらいだから、現代を生き延びるには我ながら苦労も多いが、「メンチャイ」だの「モツレク」だの、どこかスノップの臭いのする奇癖には染まらずに済んだ。何も目くじらを立てるほどのことではない。こらえ性の無さと言えばそれまでである。

総じて怪しげな省略語を忌避してきた私が、一度だけ、そんな言葉で先生と音楽論争を交わし、完膚なきまでにやつつけられた経験が高校時代にある。ロシア系の名前には舌を噛みそうなものが多いが、シヨスタコーヴィチなどはその最たる例で、私を含めて皆「シヨスタコ」と呼んでいた。

「シヨスタコ」事件の舞台は、N高校の図書館である。私が二年生のときに、図書館が高価なオーディオ装置を買い込み、毎週土曜日の放課後にレコードコンサートが開かれた。

命」というサブタイトルまで付けられた。私は図書館に並んでいる音楽書を読み齧っていたから、その音楽を、「社会の治安維持のために黙々と働く人間警察官」を主人公にした通俗ドラマ『部長刑事』が喧伝する安っぽい正義感・使命感に結びつけて、権力者と「愚民」におもねつた俗悪なシロモノと断定した。今にして顧みれば増長にもほどがあるが、「シヨスタコ」をソ連当局お抱えの御用作曲家だとしたり顔で軽蔑したのだと思う。果たして岡本先生が怒った。

「君はシヨスタコーヴィチをどれだけ聴いた?」「『アノ五重奏』は?」「『アノ三重奏』は?」「『チェロソナタ』は?」当局による批判が即刻シベリア送りを用意する政治状況のなかで、スターリンの顔色を窺いつつ創った曲と、孤立のうちに内面の呻きを人知れず書き綴った曲とを、君自身の耳でしかと聴き比べてからものを言うがよからう。岡本先生の迫力ある叱責に、私は黙るしかなかった。

季村敏夫氏の『山上の蜘蛛』で知ったことだが、軍国主義の時代に青年期を送って一度はその風潮に深く染まった先生の戦後は、そうした履歴のもたらす人知れぬ疼ぎから始まったという。のぼせ上がった高校生が生半可な知識で口走った稚拙な論議など、先生にとつては笑止千万な言いばかりであつたらう。だがそのときの先生は、真剣そのものだった。先生の叱責がなかったならば、私はシヨスタコーヴィチの苦悶を知り得なかつたらう。彼はオラトリオ『森の歌』でスターリンが推進する五カ年計画を賛美する一方、『交響曲第十三番』では、帝政ロシアに始まり革命のな

夜の調べに寄せて

「シヨスタコ」事件と心の糧

故人となられて久しいし、具合の悪い話ではないので、敬愛の念を滲ませる意味でも、ここからは実名で書かせていただく。率先してこの「文化教育事業」を推進し、企画・立案から当日のプログラムの解説まで担当したのが、当時生徒たちの信望を一身に集めていた生物の岡本忍先生だった。後に聴いた話だが、岡本先生の志は教育者として高邁の一語に尽きる。市内のもう一つの進学校、K高校に対して「文化」や「教養」の面でN高校は大きく遅れを取っていた。長田区や須磨区の下町を校区に抱えるN高校の生徒は、中産階級の子どもが多いK高校と違って文化的な家庭環境で育っていない。K高校にはすでに弦楽合奏部があり、オーケストラがたちどころに編成できたが、H高校やN高校はブラスバンド止まりで、それも高校で初めて楽器に触れたという生徒がほとんどだった。そういう生徒を相手に、レコードコンサートではフルトヴェングラーとカラヤンの聴き比べといった企画を岡本先生は立て、音楽史に通曉した該博な教養と飾らない気さくな話しぶりに魅かれて、毎回全ての座席が埋まった。やがて岡本先生を顧問に「コンサート委員会」が発足し、放送部の音楽番組制作担当者だった私もスカウトされて毎日のように図書館に屯した。会議は楽しい。鷹取山に夕陽が沈む刻限まで、私たちは岡本先生を囲んで音楽談義に耽った。

「シヨスタコ」論争は、シヨスタコーヴィチの有名な『第五シンフォニー』を、私がけなしたことから始まった。民放のテレビ番組に『部長刑事』というローカルドラマがあつて、そのテーマ音楽が「シヨスタコ」の『第五』最終楽章だった。ティンパニがかまびすしく連打され、金管楽器が勇壮なマーチを咆哮するその楽章を、私は昔も今も好まない。だがソ連の聴衆は初演に狂喜し、とりわけスターリンが絶賛して、いつからか「革

かでも続けられたユダヤ人迫害を告発するエフトシエンコの詩篇『バービー・ヤール』を曲中に挿入するという危険を、あえて冒している。独裁者が恐怖政治で民衆を押しさえ込む全体主義国家において一芸術家が辿らざるを得なかつた茨の道。それは私にとつて重いテーマとなった。

今大病を患い半ば奇跡的に生還を果たしたものの、生の終焉を絶えず意識する日々にあつて、音楽は、詩とともに生きることの最後の支えである。その音楽が、虚栄でも知的アクセサリーでもなく、限らない喜びと思索をもたらしてくれる糧であることを、私は母校から、土曜日のレコードコンサートから、図書館での談笑から、岡本先生のあの日の叱責から学んだ。

教師になつてから、先生の御宅にお邪魔したことがある。門の脇に共産党の選挙ポスターが貼つてあつた。早々と共産党の活動から身を退いた私だが、それを見たときはかすかに心が痛んだ。音楽以外にも実に多趣味であつた先生。拙宅のリビングルームには、先生が退職金の大半をはいたという尾瀬とネパールの豪華な写真集が眠っている。報われることの少ない政治活動を最期まで続けながら、世間的名声や榮譽とは無縁な場所で、星屑のような贅を存分に撒き散らして逝つた人生。戦後世代は一九七〇年代に戦争の痕跡を魂の暗部に沈めた人々の第一線からの退場をもつて終わったと、内田樹氏は『疲れすぎて眠れぬ夜のために』に書いている。戦争を知る彼らはリアリストであつた。制度もシステムもイデオロギーも幻想に過ぎない。イデオロギーと人生の価値とを見事に峻別した岡本先生の生き方も、またリアリストのそれであつたはずだ。

故人となつた恩師の思い出のために

綾見謙 年譜

この「綾見謙年譜」は、神戸文学館で行われた兵庫県現代詩協会主催のシンポジウム「綾見謙〈兵庫詩人〉の世界」(2013年1月19日〈土〉)の会場に配られた冊子に掲載されたものを転載するものです。

一九二二年(大正10) 九月二五日・神戸に生まれる

一九四〇年(昭和15) 七月・三菱神戸造船所内某工場で、職場機関誌『釣鐘草』を創刊、編集発行にあたる

一九四一年(昭和16) 二月・文芸誌『文芸復興』に参加

六月・『日本詩壇』同人。

六月・回覧詩集『未完成』発行。

六月・回覧詩集『風雲抄』発行。

八月・文芸誌『文芸工作』に参加。

一九四二年(昭和17) 三月・回覧冠句集『早苗』創刊、編集発行。(冠句結社『文芸塔社』神戸支局)内の新人冠句研究誌として発足。

九月・詩誌『記録』創刊、編集発行。

十月・『詩文学研究会』会員

十一月・詩誌『詩洋』同人。

十一月・詩誌『記録』4号を、『兵庫詩人』に改題、編集発行に当たる。(第一次)

十一月・詩誌『兵庫詩人』5号発行。

十二月・詩文学研究会より、詩集『白い溪流』を出版・詩文学研究会(東京)刊行。

一九四三年(昭和18) 一月・歌誌『短歌至上主義』阪神支社『藤波会』に参加、機関誌『季節風』に作品発表。

十一月・通信省の命により野戦郵便使隊要員として

中支に従軍。

一九四四年(昭和19) 中支に従軍後、上海、南京、浦口、下関、安慶等を転々としながら、詩を書きつづける。

一九四五年(昭和20) 五月・第二詩集『旭光』を詩文学研究会(東京)より出版。(野戦版)

一九四六年(昭和21) 四月・復員。

五月・書房『火の鳥』に、小林武雄氏を訪ねる。

九月・社会党兵庫県連の常任書記として、党活動に参加。昭和24年12月、小学校の教師になるまでの約三年間、党書記。

十二月・詩誌『兵庫詩人』復刊、第一号編集・発行(第二次)。

一九四七年(昭和22) 一月・『兵庫詩人』第2号編集・発行。

二月・『兵庫詩人』第3号編集・発行。

三月・『兵庫詩人』第4号編集・発行。

四月・『兵庫詩人』第5号編集・発行。

四月・勤労文化協会を設立、事務局長として、勤労者の文化に働きかける。

七月・第三詩集『虚無よりの使者』出版・『兵庫詩人クラブ』刊。

一九四九年(昭和24) 九月・詩誌『崖』に参加。

十二月・小学校教師。

一九五〇年(昭和25) 一月・詩誌『FAUTEUR』創刊、編集・発行。

七月・詩人集団『IOM同盟』に参加。

十一月・詩誌『木靴』に参加。

十二月・文学同人誌『毒』に参加。

一九五一年(昭和26) 十月・女性文芸誌『LA・COLERE』創刊。編集・発行。

十一月・詩誌『赤穂文芸』に参加。

十二月・詩誌『生存者』創刊、編集・発行。

一月・詩誌『生存者』と、女性文芸誌『LA・COLERE』の合併号として、『生存者』二号を編

集・発行。(同年に『生存者』3号(二月)、4号(三月)、5号(六月)を編集・発行している)

九月・詩誌『連帯』に参加。

九月・詩誌『詩と詩人』同人。

十一月・『近代文学』大阪研究会より独立。神戸研究所を設立。但し『文学思潮』は、大阪と神戸の共通研究誌とする。

一九五四年(昭和29) 三月研究誌『正午』創刊。編集・発行。創刊号に小説『糞蠅』を発表。

四月・高等学校教諭。

五月・『正午』2号編集・発行。

八月・『正午』3号編集・発行。

十一月・第四詩集『綾見謙詩集』を『近代文学』神戸研究会より出版。

一九五六年(昭和31) 一月・読売新聞一月一日紙に詩作品4篇、一挙に掲載。

一九五七年(昭和32) 五月・実家を出、放浪生活に入る。(大橋注・「兵庫詩人」追悼号にはこの年より「文学生活」に入る」と記している)

一九五八年(昭和33) から一九七〇年(昭和45) までにはもっぱら小説、コメントを執筆。詩人・綾見謙中心の今回の年譜からは割愛。

◆

一九七〇年(昭和45) 十月・詩誌『粒』43号に詩作品を発表(大橋注・この年から詩作の表記が復活していく。詩誌『粒』へ43〜68号)には『兵庫詩人』復刊まで詩を発表しづけていた

一九七四年(昭和49) 四月・済生会兵庫東病院付属看護高等学校専修学校講師。

◆

一九七七年(昭和52) 七月・文学雑誌『兵庫詩人』29号復刊(第三次)

十月・第五詩集『殺意の韻律』刊行・高田屋書店神戸発行(あとがきより)この詩集で、私なりに特に説明しておきたいのは、一部に纏めました『石』の作品、それにおがましくはあったのですが、『年表』です。

◆

一九七八年(昭和53) 七月・文学雑誌『兵庫詩人』29号復刊(第三次)

十月・第五詩集『殺意の韻律』刊行・高田屋書店神戸発行(あとがきより)この詩集で、私なりに特に説明しておきたいのは、一部に纏めました『石』の作品、それにおがましくはあったのですが、『年表』です。

◆

一九七九年(昭和54) 四月・復員。

五月・書房『火の鳥』に、小林武雄氏を訪ねる。

九月・社会党兵庫県連の常任書記として、党活動に参加。昭和24年12月、小学校の教師になるまでの約三年間、党書記。

十二月・詩誌『兵庫詩人』復刊、第一号編集・発行(第二次)。

兵庫詩人賞受賞者

第1回(昭和54)	綾見 謙(辞退)
第2回(昭和55)	西本昭太郎(受賞)
第3回(昭和56)	中村 隆(受賞)
第4回(昭和57)	丸本明子(受賞)
第5回(昭和58)	大賀二郎(受賞)
第6回(昭和59)	桑島玄二(受賞)
第7回(昭和60)	伊勢田史郎(受賞)
第8回(昭和61)	内田豊清(辞退)
第9回(昭和62)	該当作品ナシ
第10回(昭和63)	福永栄子(受賞)
第11回(平成元)	丸田礼子(受賞)
第12回(平成2)	該当作品ナシ
第13回(平成3)	綾見謙(辞退)
第14回(平成4)	岡見祐輔(受賞)
第15回(平成5)	渡辺信雄(受賞)
第16回(平成6)	該当作品ナシ
第17回(平成7)	休止

これは、私個人の年表、というよりは、私を巡る、みなさんとの交友録、みたいなものを纏めておきたい、と考えた次第で、深い意味はありませんが、この年表によって、なにかを思い出していただけたら、と思っています。更に『石』の作品は、これからも書き続けてゆく、私の命題の一つです。

一九七九年(昭和54) 文学雑誌『兵庫詩人』が「兵庫詩人賞」を設ける。

一九八〇年(昭和55) 十二月・第六詩集『怠惰な狂宴』刊行・豆本「灯」の会発行文学雑誌『兵庫詩人』出版部刊。

一九九〇年(昭和65) 『兵庫詩人』より「声の詩集」(テープ10巻制作)。

一九九一年(昭和66) 十二月・第七詩集『神々の舌』刊行・文学雑誌『兵庫詩人』出版部刊。「あとがきより」石の中の「ア

ナキストや、石の中のニヒリストを転がし続けて十

余年、もうぼちぼち石から脱皮しなければ、と考え

ながらそうもならず、つい石の詩集『神々の舌』を

出すことになった。」

一九九六年(平成8) 五月・文学雑誌『兵庫詩人』93号発行情中死亡。

一九九九年(平成11) 五月・文学雑誌『兵庫詩人』終刊(100号)。

二〇〇一年(平成13) 五月・第八詩集私家版遺稿詩集『綾見謙詩集』刊行

うた 神戸詞あしび

67-2013.02 大橋愛由等



沖永良部の唄者・福田原里さん

フアエ ニシ 南風と北風が 出会う季節に

沖縄では、いきなり夏日になり、那覇市内を走る路線バスに冷房が入っていたのは驚いた。出発した神戸は真冬であつたからだ。

屋は特に予定を決めていなかったもので、世界遺産となつてい

と言われている聖地である。ただ、観光地としてさらされてい

るために、かつ御嶽自身が一見してなにもない場所であるた

に、歴代の一人の御嶽大君が使用した香炉置き石が積まれ

たその塊に、観光客が腰をかけてしまう事態が発生するのであ

る(本土の皇室神道の聖地ではありえないことであろう。まず

一般には公開されていない)。

第一日目の夜は、沖縄の多くの詩人たちと、語り合いと朗読

の夕べを持つことになった。この時かわされた内容は刺激に満

ちていた。まず「スマフツで詩を書くことの意味」について考

えた。スマフツとは「集落の言葉」という意味の宮古の表現。

沖縄本島ではシマクトゥバ、奄美ではシマグチとなる。

そして二番目は、川満信一氏が提唱した「書き言葉としての

沖縄共通語の提唱」について。これは、宮古から沖縄を相対化

するまなざしが含まれている。この二つのことについて、深く

毎年一月に恒例として

ている(みなみ旅)。

今回は、沖縄本島を皮

切りに、沖永良部島、奄美大島をめぐった。

まず最初に到着した

考えることになった(この日のことは、奄美の日刊紙である南

海日日新聞の私のコラム「神戸から」4月3日掲載に詳しく

書いたので参照していただきたい)。

詩人たちの語り合いは、午前三時まで続いた。ジャズ・ピ

アノのある店になだれこみ、ピアノを伴奏にして自作詩の朗読

が続く。川満氏をはじめ、この日の詩人たちの会を企画してく

れた松原敏夫氏も朗読に参加してくれた。沖縄の夜は熱くそし

てどこまでも深かった。

二日目は二年前に沖永良部島に那覇空港からセスナ機に乗

って向かった。空港で出迎えてくれたのが、前利潔氏。まず彼

の職場である知名町中央公民館に向かう。さまざまなことを打

ち合わせていると、そこに朝日新聞記者のA氏がふいつとやっ

てくる。取材ではなく、休暇をとって沖永良部島に来たのだと

いう。語り合っているうちにいつのまにか取材モードになつて

しまい、メモをとっている。

夜は、知名町正名集落に住む唄者・福田原里さんの民謡教室

の発表会に向かう。沖永良部島で一番多くの生徒を集めている

教室だという。三年前にも録音させてもらったが、福田さんは

相変わらず元気で、生徒のみなさんに厳しく接することもある

が、それもみな島の民謡を愛しているゆえであることがわかる。

この日出演した中堅どころの唄者のみなさんのレベルが高い。

福田さんは島の民謡を歌う基礎と心意気を伝授する。この島

も集落ごとに民謡の「ふしまげ」(奄美大島の表現ですが)やサン

シル(三線)の弾き方が違うので、生徒の皆さんはそれぞれの自

分の集落の歌い方を継承していくことだろう(例えば「アンチャ

メグワ」や「イチキヤ」を聞くといくつかわかる)。この日の演奏

を私はFMわいわい用に録音し、昼に会った朝日新聞A記者と、

大島からやってきた南日本新聞B記者、さらに地元の南海日日

新聞C記者は取材をしていた。

沖永良部島の民謡は、働き者が多いこの島の風土を反映して、

メロディーが美しく、ノリが良い曲が多い。この島から南(与

論島を含めて)沖縄の民謡の影響が濃くなるが、沖縄そのもの

ではない。やはり沖永良部島しかない特色がいくつかある。そ

れは、南風と北風が出会うこの季節に例えると、南北からの文

化伝播を、この島の文化伝子であるミクスチャー機能によつ

て沖永良部島に転位してしまうのである。

詩と評論

月刊『Mélange』VOL.78

めらんじゅ

2013年02月24日 通巻78号★

月刊『Mélange』発行所

〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1

大橋愛由等 (『Mélange』同人)

Mobile 090-5069-1840

maroad@warp.or.jp

定価 500円 (税込)